

正月は2日ばかり、頭の中でヨハン・シュトラウス I 世の「ラデツキー行進曲」が鳴っていたと思ったら、それに連動してショパンの「軍隊ポロネーズ」が鳴りだした。その時である。長らく忘れていたシャンソン・フランセーズを思い出したのは。

そこでふと、何故かシャルル・トレネの「Le revenant (幽霊)」を訳してみようかな、という気になった。頭の中では相変わらず「軍隊ポロネーズ」が鳴っているが、そのところどころに「幽霊」の短いフレーズが浮かんで消えてゆく。そこでまず原詩をパソコンで打ってみた。見るともちろん見事に韻を踏んでいる。思わずその数を数えてしまった。しかしその他にも面白いことに気付いた。

まず歌のタイトル自体が凝っている。「revenant (ルヴナン)」には「幽霊」の他に「この世に戻ってくる・感じの良い・久しぶりに戻った人」という意味があり、それはトラブルや戦争で一旦舞台から離れて復帰したトレネ自身を表しているようだ。更に面白いのは、トレネをこき使う人は歌詞の中で、同じ「幽霊」でも「fantôme (ファントム) 幽霊・亡霊」と表現されている。即ち「よい幽霊」と「悪い幽霊」と対比されているのだ。この辺が絶妙な気がする。

そして次に、彼の詩の中には表情的・表記的統一性がある。それは歌詞の第1行目。

- 1 番 Un cri dans la nuit d'hiver
- 2 番 Ça craque dans le magasin
- 3 番 Un train passe dans la nuit

また彼の詩には、よく擬声語 (オノマトペ onomatopée) が出てくる。代表的なのが題名からして爆発的に鳴っている「Boum (ブン)」で、そこには時計の音・鳥の声・鐘の音などが連続してにぎやかに出てくる。それに比べてこの「幽霊」は、むしろ表面的な音の中に忍ばせた意味がありそうだ。そこで訳すときは他の表現を当ててみたのだが、文字自体を目に映してみると、やはり「音」を感じるし、そこに文体の統一性が見える。

- 1 番 Un cri dans la nuit d'hiver
- 2 番 Ça craque dans le magasin

「cri」は一般に「叫び声」と訳されるように、ギャアギャア、ギシギシ、ガタガタというような継続的騒音を表し、「craque」はミシミシ、メキメキ、バリバリというような単発的騒音を表す。その他に2番の途中には「Il y aura du tintalan'」という、余韻を持つ音表現がある。

そして困ったのは「Une grand-mère Blanche de Castille」だ。ブランシュ・ド・カステイーユというルイ 8 世の妻。この方は夫を差し置いて外交に口を出した政治的な人。だから「grand-mère (グラン・メール)」は通常「祖母」なのだが、それは比較的良好な印象なので抵抗がある。「老婆」もちよっと意地悪そう。「国母」といってよいかどうか。さらに「grand-mère」には「家庭的な」という意味もあり、家庭的とは思えないと皮肉ってよいのか、いろいろ考えた。特に歌詞に社会的批判を含む場合は、作詞者の名誉を守るか、詩の内容を重んじるかが難しいところだ。 (2015.1.8)